

易やすしく 深く 面白い

道徳科学習指導案作成  
**超**  
×2  
入門  
最新版

道徳教育・教育経営

後藤 忠

「特別の教科 道徳」（道徳科）が始まって半年！

（最新版に寄せて）

著者

反対運動などによる混乱もなく、その心配は杞憂に終わった。

道徳科が始まってよかったという声に「教科書が全児童に行き渡った」「道徳反対と声高に言う人がいなくなり、皆道徳に無関心ではいられなくなった」「各地区小学校教育研究会の道徳部員が増えた」などが聞かれる一方で、困った（困惑している）という声もかなり聞こえてくる。

「考え、議論する道徳とか多面的・多角的などの言葉を誤解して、何でもありのデタラメな授業がある」「まるで学級活動みたいな授業」「指導の意図が全く分からない授業」「評価のための授業」など……。中でも特に深刻なのが、

「採択教科書とその教師用指導書に困っている。全く使い物にならない教材があるし、展開例では分かり切ったことを発問するので多様な考えが出てこない、なぜ？どうして？自分ならどうする？の発問が多く、子供は答え探しに翻弄される始末。おまけに中心発問が的外れとあってはお手上げである。事実、指導書をお手本にして授業をしている教師がほとんどで、これではいつまで経っても本物の授業力など身に付かない」と嘆く声である。

一般の教師（道徳に堪能でない）は教科書や指導書を信頼している。編集や指導書の執筆に携わる人はそれなりのプロだろうから、ゆえに責任も重いと云える。部内での厳格な内容検討も必要である。一方、教師の側も問題である。指導書が授業をするのではない、教師が授業をするのだ。学習指導案は自分で考えて、自分で作らなければ意味がない。道徳は特にそうだ。最初は誰でも授業は下手だが、みんなそこから出発する。自分の頭で考えた学習指導案で行う授業の良し悪しは、みんな子供が教えてくれる。それが評価の意義でもある。

道徳科は始まったばかりで、こうした混乱はやむを得ないという見方もできるが、今だからこそやるべきことがあると思ひ、「道徳科学習指導案作成②×2入門」（最新版）を急ぎ提供することにした。